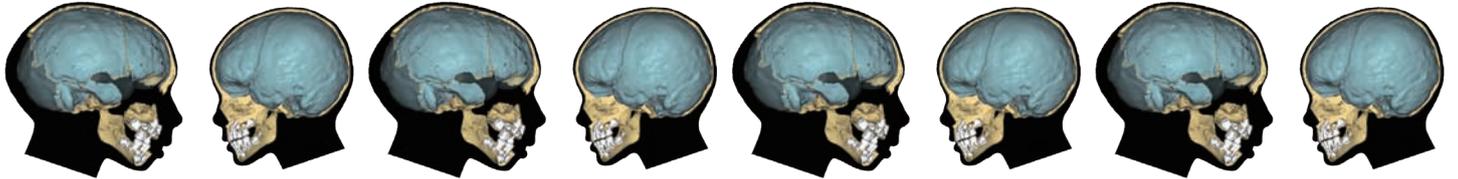


公開講演会

ネアンデルタール人の 脳機能と学習行動を探る



日時 2014年
9月28日 13:00-17:00
(開場 12:00)

会場 **東京大学本郷キャンパス
理学部2号館講堂**

主催 文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究
「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：
学習能力の進化に基づく実証的研究」(平成22-26年度)

入場無料
定員200名
(先着順)

CONTENTS

13:00-13:10

開催にあたって
赤澤 威(高知工科大学)

13:10-14:00
(講演40分+質疑応答10分)

ネアンデルタール化石頭蓋骨の
高精度復元結果から考える
荻原直道(慶応義塾大学)

ネアンデルタール人の脳を収めていた頭蓋の精密復元からわれわれとの形態差が分かってきました。それは、子供期の成長パターンが両者の間で違っていただけという話

14:10-15:00
(講演40分+質疑応答10分)

ネアンデルタール人の
脳の仮想復元結果から考える
田邊宏樹(名古屋大学)

ネアンデルタール人とわれわれの脳の形態差が小脳と頭頂葉にあることが分かってきました。それら部位の機能はわれわれの学習行動とどう関連するかという話

15:10-16:00
(講演40分+質疑応答10分)

考古学的資料からネアンデルタール人と
新人サピエンスの交替劇を考える
西秋良宏(東京大学)

ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの行動・文化の違いの多くは、両集団の社会環境の違いによって説明できる。では、社会環境の違いが生じた原因は何か。考古学的証拠からみれば多面的であったと考えられるという話

16:10-17:00
(講演40分+質疑応答10分)

文化人類学からネアンデルタール人と
新人サピエンスの交替劇を考える
大村敬一(大阪大学)

ネアンデルタール人とわれわれの間では、子供期の成長パターンの違いから学習過程がことなり、その差が重要な能力差になった。考古学資料に差がないように見えるが、そこに至る過程は異なっており、それが両者の命運を分けたのではないかという話

公開講演会

ネアンデルタール人の脳機能と学習行動を探る

開催趣旨

ビッグニュースが飛び込んできました。英オックスフォード大学のトーマス・ハイアム(Thomas Higham)氏率いる48名の国際チームが6年間にわたって取り組んでいた研究成果を、2014年8月20日の英科学誌ネイチャー(Nature)に発表しました。

国際チームが目指していたのは、最新の年代測定技術を用いて、ヨーロッパ先住ネアンデルタール人と入植してきた最初の現生人類たちの遺跡年代を測り直して生存時期を決定し、両者の出会いから、両者のその後の関係を復元することにありました。

国際チームによれば、現生人類がヨーロッパに入植してきたのは45,000年前となります。ネアンデルタール人の住み着いていた遺跡は、41,030年前から39,260年前の間にヨーロッパから姿を消します。そして、出会いから、いっぼうが消えて行くまで共存することになった両者は文化的にも遺伝的にも影響しあい、ヨーロッパ各地にさまざまな社会集団が誕生したようです。

両者の交替劇、いっぼうが他方を一方的に圧倒して行くといった単純なモデルでは説明できないという結論です。では、ネアンデルタール人とわれわれの祖先との間で“いったい何があったのか”、“何が両者の命運を分けたのか”。国際チーム今回は、このテーマは扱っていません。

まさにこのテーマ、その真相の解明に取り組んできたわれわれ「交替劇」プロジェクトチームが最終年度を走っています。これから、これまでの研究成果を随時公表してゆきます。その第一回目として今回、真相を究明する上でもっとも重要なテーマ、“いったい両者は何が違っていったのか”、というテーマを「脳の働き」「生活・行動・文化」「成長・養育」という観点からアプローチした最新の画期的研究成果を紹介します。

講師紹介

荻原 直道 おぎはら なおみち

慶応義塾大学・理工学部生体力学研究室・准教授

田邊 宏樹 たなべ ひろき

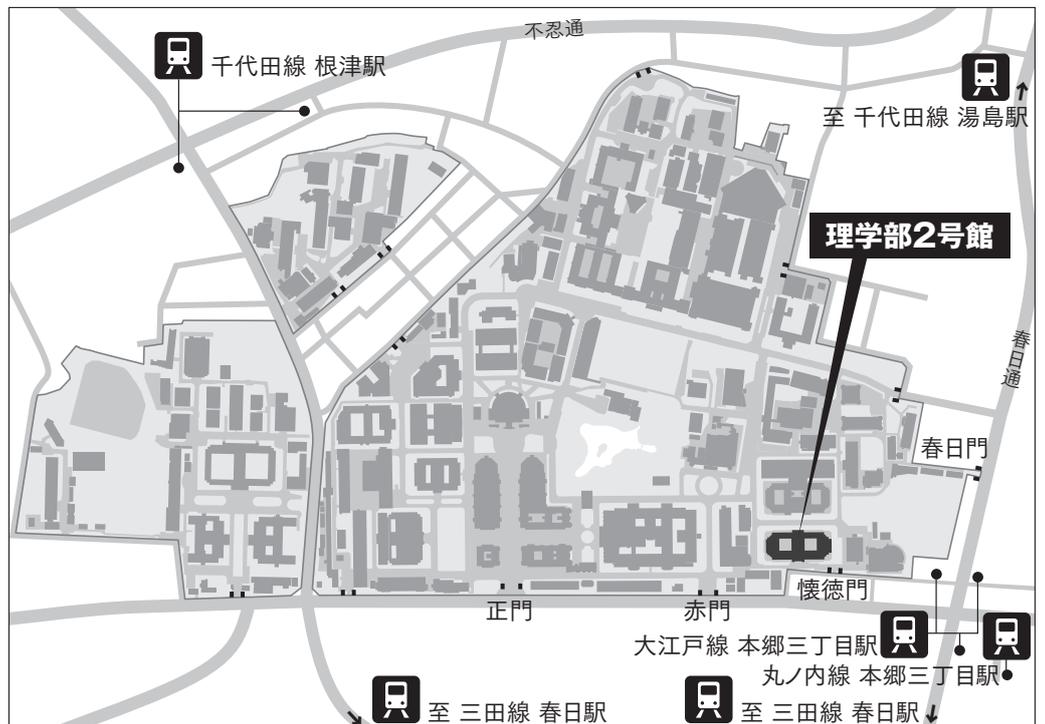
名古屋大学・大学院環境学研究科・准教授

西秋 良宏 にしあき よしひろ

東京大学・総合研究博物館・教授

大村 敬一 おおむら けいいち

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授



会場●本郷キャンパス
理学部2号館講堂

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1